

- 連立 1 次方程式は、掃き出し法で解くことができる。
- 連立代数方程式についても、掃き出し法のようなものがある。
- つるかめ算などが連立 1 次方程式で「頭を使わずに」解けるようなことが、連立代数方程式 + 大学数学のいくつかに見ることができる。

## 1 掃き出し法

(行) 階段行列：掃き出し法 (Gaussian elimination) とは、3 つの行基本変形：

- ある行に、0 でない数をかける
- ある行にある数 (0 でもよい) をかけて、他の行に加える
- 2 つの行を入れ替える

によって、与えられた行列を階段行列 (echelon matrix)：

$$\begin{pmatrix} 0 & \cdots & 0 & a_{1,j_1} & \cdots & \cdots & * \\ 0 & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & 0 & a_{2,j_2} & \cdots & \cdots & \vdots \\ \vdots & & & & & & & & \ddots & \\ 0 & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & 0 & a_{r,j_r} & \cdots \\ 0 & \cdots & O \end{pmatrix}$$

に変形することである (ここで  $j_1 < j_2 < \cdots < \cdots < j_r$  かつ  $a_{1,j_1} a_{2,j_2} \cdots a_{r,j_r} \neq 0$ )。ここで非ゼロな数  $a_{1,j_1}, a_{2,j_2}, \dots, a_{r,j_r}$  は **pivot** (枢軸) と呼ばれる。

すなわち、階段行列  $A$  とは次の様なものである：ある  $r$  が存在して (実は  $r = \text{rank}(A)$  である)

1.  $(r + 1)$  行目から最終行までは、すべて 0
2. 1 行目から  $r$  行目の各行には、pivot が 1 つずつ存在して
  - pivot は「だんだん右に」分布する
  - どの pivot も「その左と下」の数 (ないかもしれない) は 0 になっている

連立方程式の解法：掃き出し法によって、連立一次方程式を解くことができる。そのあらすじは以下のとおりである：

1. 連立方程式は、 $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  の形に変形できる (ここで  $A$  は  $m \times n$  行列、 $\mathbf{x}$  は  $n$  次元ベクトル、 $\mathbf{b}$  は  $m$  次元ベクトル)。この  $A$  を係数行列、 $m \times (n + 1)$  行列  $(A, \mathbf{b})$  を拡大係数行列と呼ぶ。
2. 拡大係数行列に掃き出し法を適用し、階段行列  $(B, \mathbf{c})$  を得たとする (ここで  $B$  は  $m \times n$  行列、 $\mathbf{c}$  は  $m$  次元ベクトル) と、与えられた連立方程式  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  は  $B\mathbf{x} = \mathbf{c}$  と同値になる。
3.  $B\mathbf{x} = \mathbf{c}$  は、 $B$  が階段行列なので逆向きに解くことができる (後退代入)。
4. できない場合、解は存在しない。ちなみに解が存在する必要十分条件は  $\text{rank } A = \text{rank}(A, \mathbf{b})$  で、解が存在する場合の解の自由度 (パラメータの数) は  $n - \text{rank } A$  である。

## 2 Gröbner 基底 (以下 $\mathbb{F}$ を体とし, $n$ 変数多項式環 $\mathbb{F}[x_1, \dots, x_n]$ を考える)

零点集合: 部分集合  $S \subseteq \mathbb{F}[x_1, \dots, x_n]$  について

$$V(S) := \{(x_1, \dots, x_n) \in \mathbb{F}^n \mid \forall f \in S, f(x_1, \dots, x_n) = 0\}.$$

イデアル: 空でない部分集合  $I \subseteq \mathbb{F}[x_1, \dots, x_n]$  がイデアルであるとは

1.  $\forall f_1 \in I, \forall f_2 \in I, f_1 + f_2 \in I,$
2.  $\forall a \in \mathbb{F}[x_1, \dots, x_n], \forall f \in I, af \in I.$

命題: 部分集合  $S \subseteq \mathbb{F}[x_1, \dots, x_n]$  について

$$\langle S \rangle := \left\{ \sum_{f \in S} a_f f \mid a_f \in \mathbb{F}[x_1, \dots, x_n], |\{a_f \neq 0 \mid f \in S\}| < \infty \right\}$$

は  $S$  を含む最小のイデアルである. さらに  $V(S) = V(\langle S \rangle).$

項順序:  $\mathbb{Z}_{\geq 0}^n$  上の全順序が項順序であるとは, 以下の 2 条件を満たすことをいう.

1.  $\forall \alpha, \forall \beta, \forall \gamma \in \mathbb{Z}_{\geq 0}^n, \alpha \geq \beta \Rightarrow \alpha + \gamma \geq \beta + \gamma,$
2.  $\forall \alpha \in \mathbb{Z}_{\geq 0}^n, \alpha \geq \mathbf{0}$

例:  $\mathbb{Z}_{\geq 0}^n$  の辞書式順序  $\geq_{\text{lex}}$  は項順序である. ここで  $\alpha, \beta \in \mathbb{Z}_{\geq 0}^n$  について,  $\alpha \geq_{\text{lex}} \beta$  とは:

$$\alpha = \beta \text{ または } \lceil 1 \leq \exists j \leq n, (\alpha_j > \beta_j \text{ and } 1 \leq \forall i < j, \alpha_i = \beta_i) \rceil$$

多重次数, リーディング係数, リーディング単項式, リーディング項:  $\alpha = (\alpha_1, \dots, \alpha_n) \in \mathbb{Z}_{\geq 0}^n$  は,  $\mathbb{F}[x_1, \dots, x_n]$  の単項式  $x_1^{\alpha_1} \cdots x_n^{\alpha_n}$  と同一視できるので,  $(0 \neq) f = \sum_{\alpha} f_{\alpha} x^{\alpha} \in \mathbb{F}[x_1, \dots, x_n]$  を「順序づけて」書き下すことができる. そこで非零な多項式  $f \in \mathbb{F}[x_1, \dots, x_n]$  について

1.  $\text{multideg}(f) = \max\{\alpha \in \mathbb{Z}_{\geq 0}^n \mid f_{\alpha} \neq 0\},$
2.  $\text{LC}(f) = f_{\text{multideg}(f)},$
3.  $\text{LM}(f) = x^{\text{multideg}(f)},$
4.  $\text{LT}(f) = \text{LC}(f) \text{LM}(f).$

割り算: 任意の  $g_1, \dots, g_m \in \mathbb{F}[x_1, \dots, x_n] \setminus \{0\}$  と任意の  $f \in \mathbb{F}[x_1, \dots, x_n]$  について, 以下をみたす  $h_1, \dots, h_m, r \in \mathbb{F}[x_1, \dots, x_n]$  が存在する (この  $r$  の 1 つを  $r = \text{red}(f; g_1, \dots, g_m)$  と書く.  $g_1, \dots, g_m$  が Gröbner 基底のとき,  $r$  は一意的であることが証明できる).

1.  $f = g_1 h_1 + \dots + g_m h_m + r,$
2. 任意の  $1 \leq i \leq m$  について,  $h_i = 0$  または  $\text{multideg}(g_i h_i) \leq \text{multideg}(f),$
3.  $r = 0$  または  $r = \sum_{\alpha} r_{\alpha} x^{\alpha}$  において  $r_{\alpha} \neq 0$  ならば  $1 \leq \forall i \leq m, \text{LM}(g_i) \nmid x^{\alpha}.$

**Gröbner 基底の定義** :  $f_1, \dots, f_m \in \mathbb{F}[x_1, \dots, x_n] \setminus \{0\}$  が Gröbner 基底とは

$$\langle \text{LT}(f) \mid f \in \langle f_1, \dots, f_m \rangle \setminus \{0\} \rangle = \langle \text{LT}(f_1), \dots, \text{LT}(f_m) \rangle.$$

**S 多項式** : 非零な多項式  $f, g \in \mathbb{F}[x_1, \dots, x_n]$  の S 多項式とは

$$S(f, g) = \frac{\text{LCM}(\text{LM}(f), \text{LM}(g))}{\text{LT}(f)} f - \frac{\text{LCM}(\text{LM}(f), \text{LM}(g))}{\text{LT}(g)} g.$$

**Buchberger のアルゴリズム** : 与えられた非零な多項式  $g_1, \dots, g_m \in \mathbb{F}[x_1, \dots, x_n]$  について,

$\text{red}(S(g_i, g_j); g_1, \dots, g_m) \neq 0$  となる  $1 \leq i < j \leq m$  が存在するとき, 1 組選んで  $g_{m+1} = \text{red}(S(g_i, g_j); g_1, \dots, g_m)$  とする

という操作を繰り返す. 有限回でこの操作は終了し,  $g_1, \dots, g_m$  を延長した Gröbner 基底  $g_1, \dots, g_k$  がえられる (当たり前だが, このとき  $\langle g_1, \dots, g_m \rangle = \langle g_1, \dots, g_k \rangle$  となる).

**消去法** : 項順序として  $\geq_{\text{lex}}$  を採用する.  $G = \{f_1, \dots, f_m\} \subseteq \mathbb{F}[x_1, \dots, x_n] \setminus \{0\}$  が Gröbner 基底のとき, 任意の  $1 \leq k \leq n$  について  $G_k := G \cap \mathbb{F}[x_k, \dots, x_n]$  も Gröbner 基底で, さらに

$$\langle G_k \rangle = \langle G_1 \rangle \cap \mathbb{F}[x_k, \dots, x_n].$$

### 3 Lagrange 未定乗数法

**陰関数定理** :  $\mathbb{R}^2$  の開集合  $U$  で定義された  $C^1$  級関数  $f : U \rightarrow \mathbb{R}$  を考える.  $(a, b) \in U$  が,  $f(a, b) = 0$  と  $\partial_2 f(a, b) \neq 0$  を満たすとき,  $(a, b)$  を通る  $f(x, y) = 0$  で定まる陰関数が存在する. より正確に言うと, ある  $\delta > 0$  が存在して, 次が成り立つ :

1. 以下を満たす関数  $\varphi : (a - \delta, a + \delta) \rightarrow \mathbb{R}$  がただ一つ存在する :

- $\forall x \in (a - \delta, a + \delta), (x, \varphi(x)) \in U,$
- $\forall x \in (a - \delta, a + \delta), f(x, \varphi(x)) = 0,$
- $\varphi(a) = b.$

2. さらに  $\varphi$  は  $C^1$  級で, 微分係数について以下が成り立つ

$$\forall x \in (a - \delta, a + \delta), \varphi'(x) = -\partial_1 f(x, \varphi(x)) / \partial_2 f(x, \varphi(x)).$$

**極大** :  $\mathbb{R}^2$  の開集合  $U$  で定義された関数  $f : U \rightarrow \mathbb{R}$  を考える.  $\mathbf{a} \in U$  で  $f$  が極大 (点) であるとは

$$\exists r > 0, \forall \mathbf{x} \in U(\mathbf{a}; r), f(\mathbf{a}) \geq f(\mathbf{x}).$$

(注)  $U(\mathbf{a}; r) = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2 \mid \|\mathbf{x} - \mathbf{a}\| < r\}$  は, 中心  $\mathbf{a}$  で半径  $r$  の開円盤である. 極小も同様に定義される. 極大・極小になる点を極値 (点) とよぶ.

極値の候補： $\mathbb{R}^2$  の開集合  $U$  で定義された関数  $f : U \rightarrow \mathbb{R}$  について、 $\mathbf{a} \in U$  が  $f$  の極値点になっているとする。  $\text{grad } f(\mathbf{a})$  が存在するならば、  $\text{grad } f(\mathbf{a}) = \mathbf{0}$  が成り立つ。

条件付き極大： $\mathbb{R}^2$  の開集合  $U$  で定義された関数  $f : U \rightarrow \mathbb{R}$  を考え、さらに束縛条件を与える  $g : U \rightarrow \mathbb{R}$  も考える。  $\mathbf{a} \in U$  が束縛条件  $g = 0$  での極大（点）であるとは（ $g(\mathbf{a}) = 0$  かつ）

$$\exists r > 0, \forall \mathbf{x} \in U(\mathbf{a}; r), (g(\mathbf{x}) = 0 \Rightarrow f(\mathbf{a}) \geq f(\mathbf{x})).$$

**Lagrange 未定乗数法**： $\mathbb{R}^2$  の開集合  $U$  で定義された関数  $C^1$  級の  $f, g : U \rightarrow \mathbb{R}$  について

$$\mathbf{a} \in U \text{ が束縛条件 } g = 0 \text{ での極値, かつ } \text{grad } g(\mathbf{a}) \neq \mathbf{0}$$

ならば、  $\exists \lambda \in \mathbb{R}, \text{grad } f(\mathbf{a}) = \lambda \text{grad } g(\mathbf{a})$ . ( $\lambda$  は Lagrange 未定乗数 (multiplier) とよばれる)

(注) 束縛条件下で極値を求めようとするならば、  $g(x, y) = 0$  から  $x$  または  $y$  を消去して、問題を「小さく」しようとするのが自然な考えである。しかしラグランジュ未定乗数法では、いったん変数  $\lambda$  を足して、問題を難しくしているようで興味深い（「量子力学的な」正当化もあるそうです）。

## 4 応用

周長が一定（簡単のため 2 とする）の三角形のうち、面積が最大になるものは正三角形であることを示したい。三角形の 3 辺の長さを  $a, b, c$  とすると、  $a + b + c = 2$  という束縛条件のもと（本当はとりあえずさらに  $0 < a, b, c < 2$ ）、  $S^2 = (1-a)(1-b)(1-c)$  ( $S$  は三角形の面積でヘロンの公式を用いた) を最大化する問題と翻訳される。ラグランジュの未定乗数法より、連立方程式

$$a + b + c = 2, \quad -(1-b)(1-c) = \lambda, \quad -(1-a)(1-c) = \lambda, \quad -(1-a)(1-b) = \lambda$$

を解く。これを解くのは易しいが、今は「頭を使わずに」解くことに興味がある。そこで  $x_1 = a, x_2 = b, x_3 = c, x_4 = \lambda$  とし、  $\geq_{\text{lex}}$  を項順序とし、  $g_1 = a + b + c - 2, g_2 = bc - b - c + \lambda + 1, g_3 = ab - a - b + \lambda + 1, g_4 = ac - a - c + \lambda + 1$  に Buchberger のアルゴリズムを適用する。

1.  $\text{red}(S(g_1, g_3); g_1, g_2, g_3, g_4) = b^2 - b - 2\lambda$  とできるので  $g_5 := b^2 - b - 2\lambda$ .
2.  $\text{red}(S(g_1, g_4); g_1, g_2, g_3, g_4, g_5) = c^2 - c - 2\lambda$  とできるので  $g_6 := c^2 - c - 2\lambda$ .
3.  $\text{red}(S(g_1, g_5); g_1, g_2, g_3, g_4, g_5, g_6) = -b\lambda - 2c\lambda + 2\lambda$  とできるので  $g_7 := -b\lambda - 2c\lambda + 2\lambda$ .
4.  $\text{red}(S(g_1, g_6); g_1, g_2, g_3, g_4, g_5, g_6, g_7) = 3c\lambda - 2\lambda$  とできるので  $g_8 := 3c\lambda - 2\lambda$ .
5.  $\text{red}(S(g_1, g_7); g_1, g_2, g_3, g_4, g_5, g_6, g_7, g_8) = -3\lambda^2 - \lambda/3$  とできるので  $g_9 := -3\lambda^2 - \lambda/3$ .

以上で繰り返しは終了し、  $G = \{g_1, \dots, g_9\}$  は  $\langle G \rangle = \langle g_1, \dots, g_4 \rangle$  となる Gröbner 基底である。

1. まずは  $\lambda$  を求める。  $\lambda$  の候補は  $G \cap \mathbb{R}[x_4] = \{g_9\}$  より、  $g_9 = 0$  を解いて  $\lambda = 0, -1/9$ .
2. 次に  $c$  を求める。  $c$  の候補は  $G \cap \mathbb{R}[x_3, x_4] = \{g_6, g_8, g_9\}$  より、  $(c, \lambda) = (0, 0), (1, 0), (2/3, -1/9)$ .
3. 次に  $b$  を求める。  $b$  の候補は  $G \cap \mathbb{R}[x_2, x_3, x_4] = \{g_2, g_5, g_6, g_7, g_8, g_9\}$  より、  $(b, c, \lambda) = (1, 0, 0), (0, 1, 0), (1, 1, 0), (2/3, 2/3, -1/9)$ .
4. 以上から  $(a, b, c, \lambda) = (1, 1, 0, 0), (1, 0, 1, 0), (0, 1, 1, 0), (2/3, 2/3, 2/3, -1/9)$  と求まった。